

は、乳歯列完成後から緩徐な減少を続けた。

考察：下顎骨の発育は、摂食開始や咬合力の増大に必要な臼歯の萌出期と大きく関与しているものと思われる。また、下顎骨体の前方部の発育には、長管骨の発育と同様、膜性骨化の増大が示唆され、それが臼歯萌出場所の確保に必要なものと考えられた。

結論：下顎の発育には、大きな咀嚼力が必要な時期、すなわち環境要因の関与が示唆された。

演題4. 最近4年間に当科を受診した顎機能異常者の調査

○佐々木直光, 池田 代子, 金村 清孝,
藤澤 政紀, 東海林 理*, 石橋 寛二

岩手医科大学歯学部歯科補綴学第二講座
同歯科放射線学講座*

目的：当講座では顎機能異常者の調査をこれまで継続して報告してきた。今回は、最近4年間ににおける顎機能異常者の初診時の症状と顎関節部MR所見、ならびに Visual Analogue Scale (VAS) による主観的評価結果との関連について分析した。

調査対象：1999年1月から2002年12月までの4年間に、岩手医科大学歯学部附属病院第二補綴科において顎機能異常と診断された患者286名（女性205名、男性81名、平均年齢 39.8 ± 16.4 歳）の初診時における病態を調査した。

結果と考察：男女比、年齢分布、主訴、初発症状、誘発因子、初発症状からの期間、随伴症状については前回の報告とほぼ同様の結果であった。一方、来科経路では院外歯科からの紹介が44%と前回の32%に対し増加し、当科における紹介患者の受け入れ体制が定着してきたことがうかがえた。MR所見と症状との関係を調べたところ、両側顎関節に疼痛を訴えた患者で両側転位が認められたケースは53%であり、片側顎関節部に疼痛を訴えた患者の症状側に転位を認めたものは31%にとどまり、円板転位と症状が必ずしも一致しなかった。疼痛を主訴としていたか否かにより疼痛群と疼痛なし群に分け、VASを用いた日常生活支障度、自発痛、咀嚼時痛、開口時痛との関連を分析したところ、両群間に有意差が認められた (Mann-Whitney U-test; $P < 0.05$)。初発症状から来院までの期間を2ヵ月未満、2ヵ月以上から1年未満、1年以上の3群に分類しVAS値を比較したところ、咀嚼時痛と開口時痛に2ヵ月未満と1年以上との間に有意差が認め

られた (Scheffe's F-test; $P < 0.05$)。初発症状からの2ヵ月未満の群では77%が疼痛を主訴としているのに対し、1年以上経過した群では56%とひろきがあることが、VASの結果にも反映されたと考えられる。

結論：紹介受診するケースが増え、当科における紹介患者の受け入れ体制が定着してきた。顎機能異常者の疼痛側と関節円板転位側は必ずしも一致しなかった。患者本人の主観的評価に顎関節痛、咀嚼筋痛が与える影響は大きいと考えられた。

演題5. 本学歯学部附属病院におけるエックス線CT検査の臨床統計的考察

○近藤 大輔, 佐藤 仁, 東海林 理,
星野 正行, 泉澤 充, 高橋 徳明,
中里 龍彦*, 江原 茂*, 小豆嶋正典,
坂巻 公男

岩手医科大学歯学部歯科放射線学講座,
同医学部放射線医学講座*

目的：エックス線CT検査 (CT) は顎口腔領域における画像診断に広く用いられている。そこで今回、2001年4月から2003年3月にかけてCTを行った1204症例について、また一部は2001年7月の岩手歯学会で発表した2000年度の468症例も含めて臨床統計的に検討した。

結果：年度ごとの症例数では2000年度が468件、2001年度が561件、2002年度が643件と増加傾向を示していた。診療科別では第一口腔外科、第二口腔外科、歯科放射線科が多く、この3科で全体の約90%を占めていた。疾患別の内訳では、全体としては上皮性悪性腫瘍が最も多く、次いで顎骨嚢胞であった。

Dental MPRの検査件数は、歯学部のCT件数のうち約30%を占めており増加傾向にあった。各科別の検査件数では口腔外科および歯科放射線科の症例が多いものの、矯正歯科や口腔インプラント室も一定の割合を占めていた。疾患別分類の内訳では、CT全体では悪性腫瘍が多かったのに対して、Dental MPRではインプラントの術前検査や埋伏歯の検査が多く、骨髄炎や顎骨嚢胞の検査も増加傾向にあった。

考察：CT全体での疾患別の内訳では悪性腫瘍と顎骨の嚢胞が多く、Dental MPRでは、それらに加えてインプラント、埋伏歯や歯列不整および顎骨の嚢胞が多い傾向であった。CT全体の件数が増加しているのは、ヘリカルCT装置の更新による検査時間の短縮による

ものと考えられた。Dental MPR の件数が増加しているのは、これまでの CT では診断が難しかった症例に対しての Dental MPR の適用例が増加しているためと考えられた。

結論：本学歯学部附属病院における CT の件数は年々増加しており、口腔外科領域だけではなくその他の歯科領域においても、そのニーズが高まっていると考えられた。

演題 6. 顎関節外科外来の現状

○大平 明範, 佐藤 理恵, 根反不二生,
関山 三郎

岩手医科大学歯学部口腔外科学第二講座
顎関節外科外来

目的：顎関節外科外来における患者の動向や紹介状況および治療内容を把握することを目的とする。

対象・方法：平成15年3月12日から6月30日に当外来を受診した顎関節疾患患者に対して行ったアンケートや当外来で用いているプロトコルや当科のカルテを基に調査した。

結果：患者の性別は男性21例、女性55例で、平均年齢は男性34.5歳、女性36.4歳であった。患者住所は盛岡市34例が最も多かった。交通手段は、自家用車が39例と最も多く、来院までに要した時間は11～30分と61～120分が多かった。紹介先の診断は顎関節症と顎関節症の疑いが多く、当外来への紹介率は63.2%であった。紹介先での治療はスプリントが最も多かった。主訴は顎の痛みが44例(57.9%)と最も多かった。当外来の診断は顎関節症56例が最も多く、顎関節症の症型分類では、Ⅲb型の20例(35.7%)が最も多かった。当外来での治療法は、薬物療法が15名と最も多かった。また、顎関節鏡を用いた治療(外科療法)は16例(28.6%)であった。

考察：当外来には他施設から紹介される患者の割合が多かった。また、紹介先での治療(保存療法)に抵抗を示す、難治性の症例が紹介されることが比較的多かった。当外来では、新たに局所麻酔下(外来)で行える細径顎関節鏡システムを購入したことによって、従来よりも外科療法(顎関節鏡視下での治療)を行う割合が増えた。また、患者は沿岸部や他県から当外来を受診する例も比較的多く、1時間以上かけて当外来を受診する患者の割合が多かった。

結論：本調査によって顎関節外科外来における患者の

動向や紹介状況および治療内容が把握できた。

演題 7. 舌痛症患者の血液検査所見に関する検討

○瀬川 清, 八木 正篤, 青村 知幸,
太田 敏博, 中島 崇樹, 菅野 真人,
松尾 徹也, 水城 春美

岩手医科大学歯学部口腔外科学第一講座

目的：舌痛症の原因はまだ明確でない。一般に舌痛を生じる原因として全身的には貧血、糖尿病、低栄養状態、ビタミン欠乏などがいわれている。そこで今回、舌痛症患者における血液検査のスクリーニングをどのように進めてゆくべきかの指針を得る目的で、舌痛症と診断した患者のうち血液検査施行例に関して検討した。

対象：1999年4月～2003年3月までの舌痛症患者131例のうち血液検査を施行した77例(男性5例：平均年齢57.8歳、女性72例：平均年齢60.3歳)である。既往歴・合併疾患では、婦人科疾患(19例/31例)が最も多く、次に高血圧・心疾患(15例/23例)、胃腸疾患(15例/21例)、アレルギー性疾患(12例/19例)、甲状腺疾患(8例/16例)などであった。

結果：血液一般検査では、貧血が7例認められ、血液化学検査では、低栄養状態の疑い例が59例中10例、肝機能検査値異常例が59例中19例、腎機能検査値異常例が57例中11例であった。また、ビタミン検査ではVitamin B2低値が29例中6例、Vitamin B6低値は27例中1例で、逆にB6が高値を示したのは14例で、ビタミン剤や健康食品などの長期連用者であった。

考察および結論：今回のデータから舌痛症の原因を特定できた症例はなかったが、血液検査データに異常が認められる症例も多く、特にビタミンの血中濃度でVitamin B2低値あるいはVitamin B6高値を呈する症例が多いことから、今後症例を増やして、これら血液検査データと舌痛症との関連についてさらに検討する予定である。